慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コールハース、ズーキン、そしてベンヤミン : 都市批評の現在的困難を超えて
Sub Title	Koolhaas, Zukin and Benjamin : beyond the limitations of contemporary urban criticism
Author	近森, 高明(Chikamori, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.1 (2017. 1) ,p.149- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	有末賢教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170128-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コールハース、ズーキン、そしてベンヤミン

——都市批評の現在的困難を超えて——

近森高明

1　都市をめぐる批評的言説の現在
2　オーセンティシティ論と本質主義の危うさ
3　「つまらなさ」を引き受ける——コールハースとオジェ
4　複製的なものとジェネリックなもの
5　アウラとオーセンティシティ
6　アウラへの両義的なまなざし——ズーキンの可能性
7　時間軸の導入によるオーセンティシティの複数化
8　時間軸の導入によるジェネリシティの複数化
9　ジェネリシティとオーセンティシティの反転

1　都市をめぐる批評的言説の現在

均質化、没場所化、非-場所化、郊外化、モール化、ジェントリフィケーション、再魔術化、俗都市化、等々――近年の都市空間をめぐる批評的言説のトレンドは、一言でまとめると「街がつまらなくなっている」ということである。(1)

日本の文脈では一九九〇年代後半以降、郊外化という現象が、現代社会論と都市論が重なる地点でクローズアップされた。たとえば三浦展（一九九九、二〇〇四）は、ニュータウンの開発やチェーン店の増加による郊外の生活環境の均質化を問題にし、そうした動向は地域性や共同性を解体して、さまざまな社会問題の温床を生むと指摘した。あるいは東浩紀と北田暁大（二〇〇七）は、消費環境の変化を軸に、郊外に特徴的だった店舗群の都心部への侵入により、街の固有性が失われ、どこも同じような街になる動向を「都心内郊外化」と指摘した。かつては「おしゃれな街」とされた渋谷も、柏や大宮、立川や町田など中規模郊外都市と同列の、相対的に大きな街にすぎなくなったという。渋谷であれ近くの郊外都市であれ、アクセス可能な店舗群やアイテム群が同じであるならば、わざわざ長距離を移動して渋谷まで出かける必要はない。こうして街の固有名がもつ魅力や吸引力は失われ、すべてが郊外化するという「盛り場の死」が語られるようになった。

同様の語りはグローバルな水準でも確認できる。たとえばバルセロナの地理学者F・ムニョスは、俗都市化という概念を提唱する。グローバル化の結果、世界のいたるところで都市景観が均質化してきており、どこの都市の歴史地区やウォーターフロントを訪れても共通の景観が反復してあらわれ、同一のパターンがくり返されると指摘する。「こうして私たちは、異なった場所でも反復・複製可能な、地域の平俗〔バナル〕な都市化ともいうべきものを目の当たりにする。ならば、都市化ではなく、むしろ「俗都市化」とはいえまいか」（Muñoz

2008=2013: 1–2)。

グローバル化の動向は、均質化を誘発しつつ、ローカルなものの個性を際立たせる方向にも作用する。だがそれはG・リッツァ（Ritzer 2005=2009）や園部雅久（二〇一四）が指摘するように、擬似個性化にすぎず、一見すると都市や地域の「個性的」な特徴をフィーチャーしているかのようにみえながら、そのフォーマットは均質的である。「個性」とされるものも気軽な観光や消費の対象として、わかりやすく編集され、演出され、記号化されたものにすぎない。表層的に演出される記号的な「個性」をはぎとれば、深層には同一の均質的な仕組みが横たわっているのである。(2)

いずれにしても、本来的な都市の個性は消え去り、都市の都市らしさ、街の街らしさは失われ、どの都市もつまらなくなっている――近年の都市空間をめぐる批評的言説においては、このような語りが基本モードになっている。かつての都市論の盛況ぶりと比較すると、都市の語りのこの沈滞ぶりは対照的であるといえよう。一九七〇年代から八〇年代にかけては、文学や歴史や思想、とりわけ記号論などと深く切り結びながら、都市は、文化批評的な語りの格好の主題となっていた。一九九〇年代に入ると、身体や建築、メディアなど、関連づけられるトピックは移行しつつも、都市はなお批評的な語りを引き寄せつづけた。ところが一九九〇年代の後半以降、とりわけ二〇〇〇年代に入ってからは、都市はポジティヴな語りを誘発しなくなり、かわりに「街がつまらなくなっている」というモードが、都市の語りの基調を支配しはじめる。見方によってはこれは、都市論の一種の延命策であるともいえるだろう。つまり、都市について積極的に語るべきことがなくなった結果、「盛り場の死」「街の死」「都市の死」を言い続けることで、語りをどうにか継続する苦肉の策だったのではないか、と。

都市が文化論的な語りの対象から脱落する、その背景的要因としては、情報化とグローバル化の複合的な作用があげられるだろう。一方で、インターネットとモバイル端末の急速な普及にともない、地理的な位置が相対的

に無関連化され、どこであれ同質の経験が可能となる状況が出現する。と同時に、文化の発信・流通・消費のプラットフォームがネットとヴァーチャルの次元に移行し、都市というプラットフォームは文化の主戦場から脱落する。[3] 他方、グローバル化は都市間競争をうながし、情報や金融などの中枢管理機能を担う都市にリソースが集中することで都市の分極化が生じるが、そうしたマクロな政治・経済的状況は、スケールの高次化ゆえに生活者の視点からは不可視となり、文化論的な射程を超えてしまう。すなわち都市のプレゼンスは、微弱化と増強化の同時進行のもとにあり、生活者の目に見えるミクロ－メゾの範囲では微弱化すると同時に、目に見えないマクロ－超マクロの水準では増強化しつつある。そうした微弱化と増強化のあいだで、都市をめぐる文化的批評は、みずからの対象を見失っているのだ。

では「街がつまらなくなっている」というその先に、都市を文化論的に語る術は、もう何もないのだろうか。「盛り場の死」「街の死」「都市の死」を言い募ることで都市論を延命させるという策すら、すでに擦り切れつつある現在、何をどう語れば、都市を批評的に語ったことになるのだろうか。

本稿では、こうした問題意識のもと、ジェネリシティとオーセンティシティという二つの概念を対置させつつ、それぞれの概念が抱える限界を回避する方途のその先に、「街がつまらなくなっている」という言説の超え方を素描してみたい。そのさい重要な参照枠組みとなるのは、W・ベンヤミンによる複製技術論である。複製的なものの増殖とアウラの消失という、同時代（十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて）の徴候的問題にアプローチしたベンヤミンの姿勢は、現在の都市状況のポジティヴな語り方を探るうえでの手がかりを示唆してくれるだろう。

2　オーセンティシティ論と本質主義の危うさ

現状を「つまらない」と名指す批評的言説は、明示的であれ潜在的であれ、本質論ないしは頽落論の形式をとる。現状を「つまらない」という以上、本質的ないし本来的な「つまらなくない状態」を想定したうえで、そこからの落差でもって、現状の都市を「つまらない」と判定しているはずだからだ。「街が街らしくなくなっている」「都市が都市らしくなくなっている」と指摘するとき、いずれにしても「何かが失われている」というとらえ方になる。

その「失われたもの」が仮託される宛先として、近年、焦点化されているのが、オーセンティシティという概念である。代表的論者として、S・ズーキンの名前があげられる。ズーキンは『都市はなぜ魂を失ったか』（原題*Naked City: The Death and Life of Authentic Urban Places*）のなかで、ニューヨークを事例として、都市の「魂」としてのオーセンティシティの喪失状況を嘆き、その回復を訴えている（Zukin 2010=2013）。

ズーキンがあからさまな嫌悪を差し向ける批判対象は、ジェントリフィケーションである。すなわち低所得者層が集住する、衰退したとされるエリアを再開発し、流行と消費の魅力に満ちた高級化したエリアに変貌させ、結果的に、低所得者層を追い出すことになる一連の動向である。高級化が施され、真新しいカフェやブティックが並ぶきらびやかな街並みを、ズーキンは、退屈で均質的な、荒廃した状況とみなす。「私はむしろ、多くの場所がスターバックスやその他のカフェのオープンにより上品に修景されることで、かえって荒廃した場所となり、カプチーノによって日常的に毒されている事実について考えてみたいと思います」（Zukin 2010=2013: 19）。

それに対して、ズーキンが称揚する本来的な「つまらなくない状態」すなわち「本物の都市体験」とは、地域の多様性が担保され、自生的な文化が息づく、たとえばつぎのような状況である。「一方、民族料理を調理するときのにおいや音によって、多様性が生で感じられる地域の外観や感覚、実験的なアートギャラリーやパフォーマンス・スペース、それからストリートの独特な特性を形成する多様な地域からやってきた男女の顔や声は懐か

しく思います」（Zukin 2010=2013: 3）。

そのような実例を示しながら、だがズーキンは、オーセンティシティとは何かを厳密に定義することはしない。たしかに定義らしきものを示している箇所はある。たとえばつぎのようにズーキンは述べている。「〔……〕オーセンティシティを、「都市に住み、働くすべての人々の恒久的な『場〔ホーム〕』を形成するための文化的な権利」と再定義すれば、近年の高級化に向けた都市成長の負の効果を打ち負かすための潜在的ツールになりうるはずです」（Zukin 2010=2013: 6）。だがこれは、オーセンティシティそのものの定義というよりも、そのプラグマティックな用法、ないしは政治的なツールとしての用法を定義しているだけである。

厳密な定義のないままに、ズーキンが生彩あふれる筆致で展開してみせるのは、ブルックリンやハーレム、イーストビレッジ、ユニオンスクエア、レッドフック、コミュニティガーデン、等々において、オーセンティックとみなしうる特徴――クリエイティヴなアートの街としてのブルックリン、レッドフックの野球場で移民が営むラテンフード屋台、出会いと交流の場としてのユニオンスクエア、等々――が、ジェントリフィケーションによって危機に陥ったり、折衝や交渉の過程のなかで、オーセンティシティの書き換えや組み替えが生じたりする具体例の列挙である。並べられた例示同士が織りなす、いわば家族的類似性のうちに、オーセンティシティとは何かを浮かびあがらせようとしているのだ。このような方法を採用するのは、オーセンティシティを概念として積極的に規定した途端に本質論に陥らざるをえないことを、ズーキン自身が熟知しているためであろう。

オーセンティシティが本質論を抱え込んでしまう危険性について、下北沢の再開発問題をめぐって「共生」という観点からアプローチした三浦倫平は、D・ハーヴェイを参照しつつ、つぎのように指摘している。すなわち、オーセンティシティという認識は諸刃の剣であり、それは「資本主義的（あるいはモダニズム的）論理に対するある種の抵抗や拒否の可能性」となる一方で、「排他的で偏狭で共同体主義的な解釈とポリティクスへと人びと

を容易に向かわせる」危険性をあわせもつ、と（三浦二〇一六：四一）。

3　「つまらなさ」を引き受ける——コールハースとオジェ

他方、「街がつまらなくなっている」といいながら、本質論を抱え込まず、むしろ「つまらなさ」を積極的に引き受け、その様態と特徴をポジティヴに記述・分析しようとする視点もあらわれている。

たとえば建築家R・コールハースは、ジェネリック・シティという概念を提示する。それはグローバリゼーションを背景に、世界中に増殖しつつある、無個性的でアイデンティティを欠いた都市である。コールハースが注目する事例は、ラゴスや深圳、ドバイといった都市である。それらの都市では、建物という建物が猛烈な速度で建て替えられ、都市の軸線と輪郭は消失し、中心も周縁もなく、都市計画という概念は無効化し、すべてが不安定で流動的な状態となる。重要なのは、コールハースがジェネリックという表現に、特段の価値評価を込めていない点である。ジェネリックだから悪い、といっているわけではなく、アイデンティティの欠落した都市の増殖状況を、コールハースは、来たるべき建築に反映させるべき所与の条件として、いたって冷静かつ中立的にスケッチする。ジェネリックな状況を、否定すべき「均質化」「画一化」の動向として概括してしまうのではなく、ジェネリックなものには、固有のダイナミズムや特性があるとして、そのディテールに目をこらすのである。

あるいはまた、人類学者M・オジェは、非‐場所というコンセプトを示している。これはヒト・モノ・情報のフロー処理に最適化された空間であり、ショッピングモールや空港が典型的な事例となる。それらはもっぱら通過のための空間であって、人びとが留まり、居場所とする余地がなく、場所に対する固有の愛着を育むことがない。そうしたのっぺらぼうの空間が、現在、あらゆる都市空間に増殖し、人びとの場所の感覚や経験のあり方を

組み替えているのだという（Augé 1994=2002; 2008）。

オジェの立ち位置の独特さは、人文地理学者のE・レルフが指摘する、没場所化という考え方と対比することで明瞭になる。レルフによれば、場所は、人びとが経験や記憶に依拠しつつ、能動的に意味の創出にかかわるところであるが、それに対して現在増大しつつあるのは、そうした場所性を喪失した、没場所的な空間であるという。地域のコンテクストとは無関係なテーマや物語が外挿される「ディズニー化」、街並み保存地区など、生きられたコンテクストを切断して、いわば建物だけを冷凍保存する「博物館化」、ニュータウンなど画一的な建物が並ぶ「標準化」、等々の事例をレルフは紹介する。それらは、場所であるかのようにみせかけた場所モドキであり、人びとはそこにおいて意味の創出にかかわることができず、もっぱら既成の確定された意味を、ただ受動的に消費させられるだけだという（Relph 1976=1999）。ここでレルフは明らかに、失われゆく固有の場所性の側に肩入れをしており、それゆえそのぶん、本質論を抱え込んでいる。

それに対してオジェは、固有の場所の喪失を嘆いてはいない。オジェが示すのは、端的に、あらたに出現した空間や、そこでの経験の特徴を洗い出そうとする提案である。固有の場所が「ない」ことではなく、非－場所が「ある」ことの帰結や効果をポジティヴに問おうとするのだ。

4　複製的なものとジェネリックなもの

ジェネリックなものを、それ自身の内在的価値においてとらえ、その様態と特徴をポジティヴに記述・分析すること。コールハースやオジェが示すこの態度は、W・ベンヤミンの複製技術論におけるそれを想起させる。

ここでベンヤミンの複製技術論を参照するのは、やや唐突にみえるかもしれないが、じつは恣意的ではない。

一方でズーキンは、みずからのオーセンティシティ論のなかでベンヤミンの複製技術論に触れ、アウラとオーセンティシティを互いに重ねて論じている。他方、コールハースのジェネリック・シティ論は、ベンヤミンの複製技術論を背景的モティーフにしており、両者の議論に内在する概念の布置関係を比較すると、相互に重なる部分が大きいことが指摘されている（岩元 二〇一〇）。とすれば、複製的なものとジェネリックなもの、アウラなき芸術とオーセンティシティなき都市とは、互いに相同的であり、入れ替え可能な関係にある。それゆえベンヤミンの複製技術論を参照枠組みとすることで、ジェネリシティとオーセンティシティという二項的な概念について、両者の限界ならびに可能性を、ひとつの視座から同時に検討することができるはずである。

まずは、コールハースのジェネリック・シティをめぐる議論と、ベンヤミンの複製技術論との関係性についてみてみよう。

絵画などの伝統的な芸術作品が、オリジナルの唯一性を保持するのに対して、写真や映画、レコードなどの複製技術は、薄っぺらなコピーを大量生産するだけ、ととらえられるのが常識的であった時代状況において、ベンヤミンは、あえて複製的なもののポジティヴな価値を称揚してみせた。複製技術による作品を価値の劣る二級の芸術と位置づけ、「薄っぺらい」「偽物」「模造品」とみなす保守派の身振りは、じつは転倒しているのであり、そのように判定する基準（＝芸術の芸術らしさ）そのものが、複製技術の普及によって転換したのだという点を、ベンヤミンは鋭く暴いてみせる。十九世紀に論争の的になった「写真は芸術か」という問いは、芸術的なものの基準の不変性を自明視している点で、逆立ちをしている。写真というテクノロジーがもたらしたのは、じつのところ芸術そのものの性格の変容であり、したがってまず問われるべきは、「写真は、芸術の性格のいかなる変容をもたらしたのか」という問いなのである。

写真や映画などのテクノロジーは、一方で、礼拝価値から展示価値へと芸術の存立様式を変更させる。芸術は

もともと呪術や宗教の儀礼に用いる形象として出現した。そこでは芸術作品は存在すること自体が重要であり、見られることには重きが置かれなかった。むしろ秘匿されれば秘匿されるほど、その価値は高まったのである。しかし儀礼にもとづく礼拝価値は、大量の複製を出現させる複製技術の登場によって切り崩され、やがて霧散してしまう。作品の価値を支える営みは、秘匿されることから、積極的に見られることへと移行する。展示され、より多くの人びとの目に触れれば触れるほど、その作品の価値は高まることとなる。他方で複製技術は、スローモーション撮影や高速度撮影、クローズアップなどにより、時空の伸び縮みや拡大縮小を自在に生み出し、肉眼では知覚することができない、あらたな経験可能性の領域を切り開く。人びとの知覚の様式は、社会のあり方とともに変動するのであり、映画という新規のメディア経験は、来たるべき標準的知覚の先取り的な訓練に役立つ、とベンヤミンはいう。

ここでベンヤミンの議論にある「芸術」を「都市」に置き換えると、そのままコールハースのジェネリック・シティの議論になる。

コールハースは、都市のアイデンティティが喪失されゆく状況を、端的な事実性として示す。世界人口の急成長にともない、都市空間がグローバルな水準で拡張し、建設量が爆発的に増大する以上、伝統的な歴史的中心がもつアイデンティティは、ますます目減りしていくほかはない。歴史は、それ自体が消費され、価値を半減させ続ける。中心と周縁という対立は、その両者の距離が広がるにしたがい、中心が周縁に及ぼす支配力が限界に達して、やがては無効化する。旧来の伝統的都市を範型とする見方では、中心とアイデンティティは、都市を都市たらしめる基準的な価値であったが、コールハースはそのような見方を逆転させる。ジェネリック・シティにあっては、中心やアイデンティティはむしろ束縛条件となる。「アイデンティティは強烈であればあるほど拘束力も強く、拡張、解釈、更新、矛盾を寄せ付けない」（Koolhaas 1997=2015: 11）。

そうしてアイデンティティや中心という束縛（それは芸術作品の唯一性と重なる）から解き放たれると、都市は、自在な反復性と更新性を獲得する。「ジェネリック・シティは中心の束縛、アイデンティティの拘束から解放された都市である。〔……〕それは歴史のない都市だ。大きいからみんなが住める。お手軽だ。メンテナンスも要らない。手狭になれば広がるだけ。古くなったら自らを壊して刷新する。どこもエキサイティングで退屈だ。それは「薄っぺら」で、ハリウッドの撮影スタジオみたいに毎週月曜日の朝、新しいアイデンティティを制作することができる」（Koolhaas 1997=2015: 14）。

このように「薄っぺら」な都市の姿に、解放的なモメントを読み込むコールハースの議論は、ベンヤミンの複製技術論の発想をベースに、それを都市論へと応用したヴァージョンとして理解できる。ジェネリックなものの位相を、オーセンティシティが「ない」という否定形でとらえるのではなく、ジェネリックなものが「ある」という肯定形でとらえる文体を、いかに発明し、展開し、鍛えあげるのか。それこそがコールハースが挑戦した課題であった。

5　アウラとオーセンティシティ

それではつぎに、アウラとオーセンティシティという二つの概念の関係性についてみてみよう。ズーキンはオーセンティシティ論において、つぎのようにベンヤミンの複製技術論に言及している。

文化論者であるウォルター・ベンヤミンは、一九三〇年代に「機械的複製の時代における芸術作品」について書いた際に、彼の生涯の間に起きた、視覚的表現技術の劇的な変化について指摘しました。豪華な雑誌のグラビアや、絵はがき

> や、映画によって創作物にふれ合うことができる中で、どうすれば固有性があり、独自性がある創造物の意味を理解することができるのかを、ベンヤミンは問うたのです。〔……〕一世紀後、世間はコピーやクローン、あからさまな偽物だらけになり、彼のそういったオーセンティックな芸術作品に対する疑問は、さらに重要なものとなりました。そしてその疑問は、芸術だけではなく、都市を含めた他のあらゆる形態の文化にも当てはまります（Zukin 2010=2013: 304）。

ここではアウラとオーセンティシティは、互いに置換可能であることが示される。ひるがえって伝統的な芸術と本来的な都市、写真や映画と複製的な都市空間もまた、互いに置換可能である（なお「本物の都市」はしばしば「芸術作品」に喩えられる。H・ルフェーヴルは、都市住民が使用価値にもとづいて主体的・協働的に望ましい都市をつくりあげる権利を「都市への権利」として掲げ、産業化により「生産物」に堕落した都市を「作品」へと再形成する必要を主張する（Lefebvre 1968=2011）。またF・テンニースは、近代以前の伝統的な都市がゲマインシャフト的な共同生活形態を実現していたとして、それは、建築的形態においても居住者の行為においても「共通の感覚と精神に調和せる形態を与えるものとして、芸術の普遍的な本質を示している」（若林 一九九二：一八九）という）。

ズーキンのオーセンティシティ論を、ベンヤミンのアウラ論に照らすことで得られる重要な示唆とは何か。注意したいのは、ベンヤミンの議論が、かつてあったアウラが消失したという頽落論的な構えではなく、アウラがそもそも欠如態として出現した、という遡及的な構えをとっている点である（中村 二〇一〇）。ベンヤミンの言葉を引用するなら、このようになる。「芸術作品が技術的に複製可能となった時代に衰退してゆくもの、それは芸術作品のアウラである」（Benjamin 1935-36=1995: 590）。すなわちアウラは失われた何か、より正確には、何かの「失われ」として誕生したのであり、そもそもが遡及的に見出されたものにほかならない。それゆえ、複製技術の登場や芸術の性格の転換、知覚の変容といった相互連関のネットワークから切り離して、アウラとは何か、

と問うような本質論的な議論は、しばしば不毛となる。[4] オーセンティシティを問うときに、それが何であるかを直接的に問うと、途端につまずいてしまうのも、それがそもそも欠如態としてある、という遡及的な構えで問われるべき問題だからである。

それを踏まえたうえで、あえて定義的に述べるとすれば、つぎのようになるだろう。すなわち、アウラが、オリジナルな芸術作品が埋め込まれた伝統のネットワークが〈いま-ここ〉の唯一性と結びつく（より正確には、現前する唯一性の向こうに伝統のネットワークが連綿と続いているようにみえると同時に、唯一性のもとに、そのネットワークが結晶化しているようにみえる、そのような相互性が成立する）ことで生じる独特の雰囲気であり、複製的なものの増殖によって消失する「何ものか」であるとすれば、オーセンティシティは、地域が埋め込まれた由来のネットワークが地域の固有名と結びつく（これも同じように、正確には、地域の固有名の向こうに由来のネットワークが続いているようにみえると同時に、由来のネットワークが地域の固有名のもとに結晶化しているようにみえる、そのような相互性が成立する）ことで生じる独特の雰囲気であり、均質的で複製的な都市空間の増殖によって消失する「何ものか」である。

6　アウラへの両義的なまなざし——ズーキンの可能性

ジェネリックなものを肯定するコールハースと、オーセンティシティを称揚するズーキン。二人の立場を両極的にとらえるなら、ベンヤミンの複製技術論を範型とする場合、コールハースのほうに未来志向的な可能性が認められ、ズーキンは、消えゆくアウラに拘泥する守旧的な立場のようにみえるかもしれない。だが、それは一面的な見方である。ベンヤミンは、消えゆくアウラに両義的な評価を与えており、この両義性に注目するなら、一

方でコールハースの立場にもまた限界があり、他方、ズーキンの方向性にも、その限界を乗り越えうる可能性があることがみえてくる。

ベンヤミンはアウラを、一方的に切って捨てたわけではない。たしかに人びとを呪縛する重々しい権威や伝統との結びつきにおいて、アウラを否定的にとらえ、アウラの消失を解放的な契機とみなしてはいた。が、同時に、ベンヤミンはアウラに、哀惜すべき人間的なものも認めていた。たとえば初期写真に特有のアウラを、ベンヤミンは肯定的に描き出す。初期写真において肖像写真が中心的な位置を占め、それがいわばイメージの礼拝価値の「最後の避難所」となっていたことを指摘したうえで、ベンヤミンはつぎのように述べる。「人間の顔のつかの間の表情となって、アウラが初期の写真から、これを最後と合図を送る。これこそが、初期の写真の憂愁にみちた、なにものにも比べがたい美しさをなすものである」（Benjamin 1935-36=1995: 599）。(5)

アウラが消えることを、ベンヤミンは両義的に評価する。つまりベンヤミンは、ある種の両面作戦を展開しているのであり、一方では、複製的なものの地平を肯定的に探求しつつ、他方では、アウラ的なものの地平を、いわば背後に気配として残している。この点を考えるとき、複製的なものや凡庸なものをあえて肯定するコールハースの開き直りは、そうした両義性を、アウラ（＝オーセンティシティ）もろとも消去してしまうことで、ある種の脆弱さを抱え込むことがみえてくる。

浅田彰は、コールハースの立場を「資本主義的シニシズム」であり「確信犯」であると指摘している。浅田によれば、コールハースの逆説的なポジションは、つぎのようにまとめられる。「アカデミーの安全地帯からグローバル資本主義を批判するポーズを続けていても仕方がない、むしろ、「¥€$」にあえて「YES」と言い、グローバル資本主義の波に乗ってサーフしてみよう。建築の自律性だのその脱構築だのについて無駄話を続けていても仕方がない、むしろ、ニューヨークで、東京で、珠江デルタで、ラゴスで、建築を飲み込んで膨れ上がる

都市のダイナミズムに注目し、その運動の只中に身を躍らせてみよう……。こうしたコールハースのポーズは、建築の自律性にこだわる欧米のエリート建築家への批判としては、きわめて強力だろう。とはいえ、それはやはりシニカルなポーズに違いない。たとえばこの中国で、それがいかなる意味をもつか。シニシズムがたんなる現状肯定へと反転することはないのか……」（浅田 二〇〇九：六四）。

グローバル資本の流動のもとで、資本の論理が暴走し、圧倒的な量が質を凌駕し、凡庸なものが勝利するという、身も蓋もない局面に注目し、むしろそれを極端にまで推し進めるとき、何が生じるかを冷静に見極めようとするコールハース。だが批判的距離をあえて捨て去る、彼のシニシズムは、かえって端的な現状肯定へと反転しかねない。その脆弱さは、ひとつに、コールハースがベンヤミンに依拠しつつ、ベンヤミンが保持していた両義性を消去したことに由来するだろう。とすれば、ふたたびズーキン流のオーセンティシティの活かし方が問題になる。コールハースのジェネリックとズーキンのオーセンティックを対置させ、either/or で考えるのでなく、両者を包括する次元において同時に考える必要があるのだ。ジェネリックかオーセンティックか、ではなく、ジェネリックもオーセンティックも、という両面作戦が必要になる。

7　時間軸の導入によるオーセンティシティの複数化

アウラ論を踏まえつつ、オーセンティシティ論を都市の批評的言説として活かそうとするならば、前述した遡及論的な構えの含意をおさえつつ、より積極的に、本質論を回避する方策をとる必要があるだろう。ではオーセンティシティを語りながら、本質論へと陥らない方途とはどのようなものか――その手がかりはじつのところ、ズーキン自身の議論のなかに書き込まれている。

鍵となるのは、オーセンティシティ論への時間軸の導入である。オーセンティシティは時間の概念を含む、とズーキンは指摘する。

オーセンティシティは三つの異なるかたちで時間の概念を含んでいます。第一に、オーセンティシティに魅了されるということは、我々が永遠に変わらない、時間を超えた都市という理想に執着していることを示しています。我々は、歴史上のある特定の時期の文化的イメージに代表されるこの理想を、都市体験の絶対的評価基準として用いているのです。一方、第二点目として、私たちのオーセンティシティの心理的イメージは確実に変遷も映しだしており、それぞれの世代がそれぞれの時代の都市体験を持っています。世代によって異なる都市体験は、それぞれの世代の住まい、店舗、そして街区、地域、市全体に「属する」人々についての考えをかたちづくります。第三に、オーセンティシティを考えることは、広い意味で時間の重要性を示します。それは都市住民が創造への期待と、都市再開発、ジェントリフィケーション、福祉、環境的災害による絶滅の危機に対する懸念を徐々に増しているからです。（Zukin 2010=2013: 49–50）

すなわちオーセンティシティに関連して、私たちは、第一に、特定の時期の文化的イメージを理想的な都市像として絶対化し、第二に、世代共通の都市体験とそれを反映した文化的イメージは世代ごとに変遷し、さらに第三に、私たちは、創造への期待と危機への懸念というかたちで都市の行く末について配慮している、という。

このうち、第一と第二の論点はともに、構築主義的なアプローチに近い。すなわち地域に固有の伝統や由来とみえるものは、じつは事後的かつ遡及的に構築された歴史＝物語にすぎない、という見方である。別の言葉でいえば、街のルーツを語る歴史＝物語が作成される場合、そこには歴史の編集作業が不可避的に入り込む、ということである。ある地域について、ある時代の文化的イメージを由来として取りあげれば、別の時代の文化的イメージを切り捨てることになる。

ズーキンは、地域のルーツの歴史＝物語作成において、都合よくエピソードを切り貼りする編集作業がみてとれる事例をいくつかあげている。たとえばウィリアムズバーグの新興の起業家たちは、自分たちが、放置された工場を有効活用してアートギャラリーやパフォーマンス・スペース、小規模醸造所に組み替え、クリエイティヴな融合状態をつくりあげたという「ルーツの物語」を誇らしげに語る。だがその物語は「一九〇〇年代初頭の「ごみをあさる人、ぼん引き、ギャング」といったものや、「ドミノ精糖会社」の労働者、地域産業の黄金期におけるプエルトリコ人技術者、ポーランド人の精肉店、ベッドフォード・アベニューでまだ営業しているメキシコ人の食料品店など」（Zukin 2010=2013: 76）の存在を切り落としたところに成立している。あるいはハーレムの再開発が主要なターゲットとしていた黒人の新・中流階級たちは、自分たちのルーツを、上流の生活を送っていた「ハーレム・ルネッサンス」に求めるが、そこでは「ダーク・ゲットー」で低レベルの生活を送る、一九六〇年代の若く、疎外された過激な活動家やギャング」の存在が、ルーツの物語から排除されている。

ルーツの歴史＝物語の構築と、そこでのエピソードの選択と切り落としという、ズーキンが断片的に示しているロジックを展開するなら、オーセンティシティは、時間軸の導入によって複数化されることになる。ある街のオーセンティシティは、単一の、一枚岩的なものではない。極端にいえば集団それぞれ、個々人それぞれの「本物の都市体験」やオーセンティシティがあるはずであり、それらのすり合わせやせめぎ合い、交渉や共存の可能性こそが、問われるべき課題となる。それはいうなれば、オーセンティシティのアイデンティティ・ポリティクス化であり、オーセンティシティの問題を、異なる本質を掲げる複数の諸主体がくり広げる力学的な均衡状態のもとに置くことで、絶えず本質化を解除し続けるという方策である。

このように時間軸の導入によるオーセンティシティの複数化という方向で、ズーキン流のオーセンティシティ論を、本質論を積極的に回避しながら、都市の批評的言説として活かすことができる。

8　時間軸の導入によるジェネリシティの複数化

さて、ここで「つまらなくない状態」が複数化されるなら、その跳ね返りとして、「つまらない状態」もまた複数化されうる可能性がある。オーセンティックなものが複数化されうるならば、ジェネリックなものもまた複数化されうるだろう。すなわち、均質化という状況を、一枚岩のプロセスとして語るのではなく、それ自体、複数の時間性のもとで眺めるという道筋がありうる。均質化というものを、私たちはいわば過度に均質的に語ってきたのであり、そうした均質化の均質化を脱して、均質化の複数化や多層化、均質的なものの多重的な歴史について考えなければならない。

たとえば「グローバリゼーションによる均質化」という定型的図式は、あまりにも無批判に反復されてきたのではないか。グローバル化はたしかに資本の流動を加速化させ、無個性的な都市景観の増殖を促してきたかもしれない。しかし、均質化の由来は単層的ではなく、時代ごとに、つねに「つまらない状態」を形成するプロセスは生じている。その多層の積み重ねのうえに、グローバル化は、最新の「つまらない状態」を付け加えているにすぎない。それゆえ「グローバリゼーションによる均質化」という、わかりやすく単純化された図式を解除したところに、ジェネリックなものの、意外な歴史的「豊かさ」が出現するはずである。

日本のありふれた都市景観の事例でいえば、たとえば雑居ビル、地下街、あるいは商店街、等々。それらは視点の取り方次第では、均質的な「つまらない状態」をつくる要素群であるが、それぞれ、時代ごとに一斉に建造ブームが生じたものであり、いわば凡庸さの複数のパラダイムを構成している。

雑居ビルは、小規模な敷地に飲食店や金融業、風俗業などがテナントとして入る貸しビルであり、一九六〇年代頃から、都心の駅前や盛り場に建設されはじめた。「背景には高度経済成長ならではの人々の巨大なエネル

ギー（床需要と事業主への資本蓄積、工法の普及など）があり、細分化された敷地、混合しやすい土地利用といった日本の都市の特性を踏まえ、多様な要素を複合させることで雑居ビルは普及してきた」（初田 二〇一三：一三九）。装飾的な要素を欠いた箱形のデザインが多く、その無機質性を埋め合わせるかのように、テナントの看板がビル全体を覆う。いかにも雑然としたその外観は、日本の都市景観を構成する典型的な要素である。

地下街の建設も、高度経済成長期に集中している。一九五〇年代には、周辺の商店主など地元有志の共同出資をもとに形成されたり（例：浅草、池袋、渋谷）、民間事業者が主体となって、地下鉄の新規建設に合わせて設置されたりした（例：名古屋）。一九六〇年代に入ると、それまで散発的であった建設ペースが上昇する。その背景をなすのはモータリゼーションの本格化である。主要ターミナル周辺では渋滞が深刻化し、歩車分離と駐車場の整備の必要性が訴えられる。その解決策として、民間事業者を主体に駅前に地下駐車場を整備させるという方策が採られたのだが、そのさい地表と駐車場のあいだの空間を商業スペースとして貸し出す不動産業の認可をセットにして、インセンティヴを高めるという手法が考案された。地価の高い都心部に「空地」を創出し、テナントから収益を得るという都市再開発型の地下街は、有力なモデルとして資本を吸収し、全国的な地下街建設ブームが生じる（東京駅八重洲地下街、横浜駅西口ダイヤモンド地下街、神戸さんちかタウンなど）（近森 二〇一五）。

商店街は、常識的には伝統的な存在と考えられがちだが、新雅史（二〇一二）が鋭く指摘したように、そのコンセプトはじつは近代の発明品である。すなわち二十世紀初頭に都市へと流入してきた、農業層の多くが営みつつも、貧困者が多かった零細小売商を救済するため、百貨店、協同組合、公設市場という、小売業の最新の要素をハイブリッド的に組み合わせたコンセプトとして、商店街は登場した。そこでは、専門性の高いワンストップの商業空間としては百貨店が、組織化のうえでは協同組合が、そして地域住民に物資を滞りなく供給する役割としては公設市場が、それぞれ準拠枠組みとなっていた。それゆえ地域ごとにそれぞれオーセンティックな由来を

もつ商店街があるというわけではなく、多くの商店街は、ある時期に同時多発的に出現したのであり、同一の商業パラダイムの産物としてジェネリックな存在なのである。

このように雑居ビル、地下街、商店街は、それぞれ時代ごとの凡庸さのパラダイムを構成している。そうして、それら「つまらない状態」の積み重ねのもとに、最新の「グローバリゼーションによる均質化」が付け加わり、現状の都市の「つまらない状態」が形成されている。都市の凡庸なジェネリシティを、このように複数的な時間性のもとで眺めるとき、均質化プロセスは均質的ならざる表情をみせ、ジェネリシティそれ自体の深さや多層性が浮かびあがってくる。

9　ジェネリシティとオーセンティシティの反転

さてここで、冒頭の問いに戻ろう。本稿の議論を導いてきたのは、「街がつまらなくなっている」という退行的な言説の先に、いかなる都市の批評的言説の可能性が残されているのか、という問いであった。現状をとらえる都市論的な思考の二極をなすのはズーキンとコールハースであり、一方で「つまらなくない状態」を「つまらない状態」への対抗的批評のモメントに設定するオーセンティシティ論は、本質論を抱え込む危険性をもち、他方で「つまらない状態」をあえて引き受けるジェネリシティ論は、シニシズムをともないつつ、均質化の均質化に陥る可能性をもっていた。そこで、時間軸の導入により、オーセンティシティとジェネリシティをともに複数化するという戦略が検討されたわけだが、ではその結果、いかなる都市の批評的言説の可能性が示されうるだろうか。ただ語りの複数化を目指すのであれば、のんべんだらりとした歴史的な語りが多数生産されるだけ、というあらたな退行の可能性はないだろうか。そうなると批評を批評たらしめる緊張のモメントが失われてしまうの

ではないか。

そこで、オーセンティシティとジェネリシティを同時に視野に含みつつ、両者を複数化するという戦略の先に、批評的な緊張をもたらすモメントが提起されねばならない。ここでそうしたモメントとして試行的に示してみたいのは、つぎのようなものである。オーセンティシティとジェネリシティをともに複数化させるとき、両者が互いに交錯する地点を浮上させることができる。すなわち凡庸なジェネリシティの積み重ねのもとに、固有のオーセンティックなものが宿る瞬間を見出すことができる。この瞬間を、批評的なモメントとして提起してみたい。

ジェネリシティのオーセンティシティへの反転――これにはおよそ二つのパターンが考えられる。第一に、対象の経年変化と、対象の置かれるコンテクストの時代的変化が、オーセンティシティを生み出す場合。第二に、異なる時代の「つまらない状態」が重層することで、固有の「つまらなくない状態」が出現する場合。

第一のパターンの事例として、東京都中央区の三原橋地下街をあげてみよう。一九五二年に完成したこの地下街は、かつての三十間堀川が戦後、空襲の瓦礫処理で埋め立てられ、川に懸っていた三原橋が無用になったところに、橋梁の下の空間を利用して建設された。飲食店やパチンコ店などが入居していたが、都の所有物を又貸しするなど権利関係にグレーな部分があり、何度か立ち退きが命じられつつも、長らく存続していた。ところが耐震性の問題から取り壊しが決まり、二〇〇八年に東京都から明け渡し要請が出されたのを受け、老舗の名画座「シネパトス」の閉館が予告されて以降、取り壊しを惜しむ声があがり出す。それまで忘却されていた地下街の存在に「レトロな魅力」や「昭和の香り」などの意味が付与され、保存を訴える団体も登場する。ここにおいて三原橋地下街は、失われゆくオーセンティシティの在処として突如主題化され、ノスタルジーの投影先として立ちあがったのである。対象の経年変化と、それが置かれるコンテクストの変遷にしたがって、かつては凡庸だったジェネリックな建造物が、濃厚なオーセンティシティを充満させた場所へと転換する――三原橋地下街はその

典型例である。

第二のパターンの事例として、吉祥寺の街並みがあげられる。初田香成は、吉祥寺という街の「個性」が、「さまざまな時代の歴史性が積層した総体としての結果」として生じていることを指摘している。すなわち、「吉祥寺には戦前からの歴史をもつ中心部の商店街、戦後の闇市に起源を持つ駅前のハモニカ横町、それらを囲むように昭和四〇年代に建った大型店、さらにその外側に広がる個店群というように、多様な時代の特長を生かした地区が、それぞれ魅力を放ちながら、共存している」（初田 二〇一一：四）。他にかえがたい街の個性とみえるものは、複数のレイヤーの効果として出現しているのであり、それぞれのレイヤー自体は、時代ごとのありふれた、ごく凡庸な建築物やインフラストラクチャーにすぎない。時代ごとの「つまらない状態」の積層が、結果として「つまらなくない状態」としての個性を生みだす。これもまた、ジェネリシティの積み重ねからオーセンティシティが生じるひとつのパターンである。

＊　＊　＊

ジェネリシティのオーセンティシティへの反転――ここではその考えうるシンプルな場合を例示しただけだが、無数の事例がみつかるはずである――は、ジェネリシティとオーセンティシティ、それぞれを硬直的にとらえるような見方を、緩やかに解きほぐしてくれるモメントとなる。それゆえ、その瞬間を念頭に置いておくことで、私たちは街の「つまらなさ」を引き受けつつ、シニシズムにも本質論にも陥ることなく、「つまらなさ」そのものの「豊かさ」を真にポジティヴに語ることができるだろう。ジェネリシティとオーセンティシティを either/or の両極性としてとらえるのではなく、その両者を包括するような次元から考えること。ズーキンの疎外論とコールハースのシニシズムを、ともに慎重に回避しながら、双方の可能性を突き詰めること。そうして、かたやオーセンティシティの議論が陥りがちな本質論を、かたやジェネリシティの語りが陥りがちな均質化の均質化を

脱却するべく、時間軸の導入によって、オーセンティシティとジェネリシティをともに複数化すること。そのようにして、都市の文化批評的な語りの現在的な困難さを何重にも解除しながら、なおも有意味な何かを語りうるとすれば、この反転――ジェネリシティのオーセンティシティへの反転――の瞬間こそが、こちらの視線を柔軟に解きほぐしつつ、可能なる都市批評の方向性を示してくれるのではないだろうか。

（1）以下、本稿の議論は、二〇一六年五月二十一日に開催された、二〇一六年度関東都市学会春季大会シンポジウム「「誰のため」「いかにして」の景観論を超えて――美観論争なき丸の内の再開発」における、著者による口頭でのコメント「コメントにかえて：街の「つまらなさ」をどう考えるか？」で述べたアイディアをもとに展開したものである。本コメントは、その文字起こし原稿が『関東都市学会年報』十八号（印刷中）に掲載される予定であり、本稿の議論と一部重なるところがある。なお、本シンポジウムのあと、著者は報告者であった中島直人氏、松橋達矢氏、杉平敦氏、ならびに司会を務められた野坂真氏らとともに、都市計画と都市社会学を横断する都市学関連のサロン的研究会を数回開催しているが、その初回（二〇一六年八月五日）に、著者のコメントを発展させた内容を報告させていただき、参加者から有益な助言をいただいた。ここに記し、感謝の意を表したい。

（2）コールハースは、歴史的都市であるバルセロナですら、個性をわかりやすく編集しすぎたあげくにジェネリックになっているという。「たとえばバルセロナのように古い歴史をもつ独自な都市でも、自らのアイデンティティを単純化しすぎてジェネリックになることもある」（Koolhaas 1997=2015: 15）。

（3）この点をコールハースはつぎのように表現する。「ジェネリック・シティとは、都市生活の大半がサイバースペースに移った後に残った場所を言う」（Koolhaas 1997=2015: 15）。

（4）アウラとは何かというダイレクトな問いに対しては、ベンヤミンは、はぐらかしめいた答えを差し出すだけである。「そもそもアウラとは何か。空間と時間から織りなされた不可思議な織物である。すなわち、どれほど近くにであれ、ある遠さが一回的に現われているものである。夏の午後、静かに憩いながら、地平に連なる山なみを、あるいは憩っている者の上に影を投げかけている木の枝を、目で追うこと――これがこの山々のアウラを、この木の枝のア

ウラを呼吸することである」（Benjamin 1935-36=1995: 592）。

（5） ただしこの場合も注意が必要なのだが、ベンヤミンは初期写真のアウラを、対象に内在する本質的な何ものかとしてはとらえてはいない。過去と現在のあいだの歴史的な緊張関係を前提としてのみ、「失われたもの」としてのアウラが、初期写真のうちに遡及的に見出されるという構図を、ベンヤミンは慎重に書き込んでいる。「写真小史」の最後にはこのようにある。「［……］これらの問いのうちに、現代人をダゲレオタイプから隔てる九十年の距離が、その歴史的な緊張を放電している。この電気の火花に照らされていればこそ、初期の写真はあれほどに美しくも近づきがたく、祖父たちの時代の暗闇から立ち現われてくるのである」（Benjamin 1931=1995: 581）。

参考・引用文献

新雅史、二〇一二、『商店街はなぜ滅びるのか――社会・政治・経済史から探る再生の道』光文社新書。

浅田彰、二〇〇九、「コールハースと語る――シニシズムをめぐって」『ユリイカ』四一巻七号、六四－六八頁。

Augé, Marc, 1994, *Pour une anthropologie des mondes contemporains*. Aubier.（＝二〇〇二、森山工訳『同時代世界の人類学』藤原書店。）

――, 2008, *Non-places*. London: Verso.

Benjamin, Walter, 1931, *Kleine Geschichte der Photographie*.（＝一九九五、浅井健二郎編訳・久保哲司訳「写真小史」『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』ちくま学芸文庫。）

――, 1935-36, *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*.（＝一九九五、浅井健二郎編訳・久保哲司訳「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』ちくま学芸文庫。）

東浩紀・北田暁大、二〇〇七、『東京から考える――格差・郊外・ナショナリズム』ＮＨＫブックス。

近森高明、二〇一三、「無印都市とは何か？」近森高明・工藤保則編『無印都市の社会学――どこにでもある日常空間をフィールドワークする』法律文化社、二－二一頁。

――、二〇一五、「非－場所の系譜学・序説――高度経済成長期の地下街を主題として」『ソシオロジ』五九巻三号、七三－八九頁。

初田香成、二〇一一、『都市の戦後――雑踏のなかの都市計画と建築』東京大学出版会。
――――、二〇一三、「雑居ビル」中筋直哉・五十嵐泰正編『よくわかる都市社会学』ミネルヴァ書房、一三八－一三九頁。
速水健朗、二〇一二、『都市と消費とディズニーの夢――ショッピングモーライゼーションの時代』角川ｏｎｅテーマ21。
岩元真明、二〇一〇、「大都市的建築――ヴァルター・ベンヤミンとレム・コールハースの比較分析」東京大学建築学科難波和彦研究室『東京大学建築学科難波研究室活動全記録』角川学芸出版、三三二－三三五頁。
Koolhaas, Rem, 1997, "The Generic City", Office for Metropolitan Architecture, Rem Koolhaas and Bruce Mau, *S, M, L, XL*. Benedikt Taschen Verlag. 1238-1264.（＝二〇一五、太田佳代子・渡辺佐智江訳「ジェネリック・シティ」『S, M, L, XL+――現代都市をめぐるエッセイ』ちくま学芸文庫、一〇－四二頁。）
Lefebvre, Henri, 1968, *Le droit à la ville*. Paris: Anthropos.（＝二〇一一、森本和夫訳『都市への権利』ちくま学芸文庫。）
三浦展、一九九九、『「家族」と「幸福」の戦後史――郊外の夢と現実』講談社現代新書。
――――、二〇〇四、『ファスト風土化する日本――郊外化とその病理』洋泉社新書。
三浦倫平、二〇一六、『「共生」の都市社会学――下北沢再開発問題のなかで考える』新曜社。
Muñoz, Francesc, 2008, *Urbanización. Paisajes comunes, lugares globales*. Editorial Gustavo Gili Barcerona.（＝二〇一三、竹中克行・笹野益生訳『俗都市化――ありふれた景観 グローバルな場所』昭和堂。）
中村秀之、二〇一〇、『瓦礫の天使たち――ベンヤミンから〈映画〉の見果てぬ夢へ』せりか書房。
Relph, Edward, 1976, *Place and Placelessness*. Pion.（＝一九九九、高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』ちくま学芸文庫。）
Ritzer, George, 2005, *Enchanting a Disenchanted World*. Pine Forge Press.（＝二〇〇九、山本徹夫・坂田恵美訳『消費社会の魔術的体系――ディズニーワールドからサイバーモールまで』明石書店。）
Smith, Neil, 1996, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*. Routledge.（＝二〇一四、原口剛

訳『ジェントリフィケーションと報復都市――新たなる都市のフロンティア』ミネルヴァ書房。）
園部雅久、二〇一四、『再魔術化する都市の社会学――空間概念・公共性・消費主義』ミネルヴァ書房。
若林幹夫、一九九二、『熱い都市　冷たい都市』弘文堂。
――、二〇〇七、『郊外の社会学――現在を生きる形』ちくま新書。
――編、二〇一三、『モール化する都市と社会――巨大商業施設論』ＮＴＴ出版。
Zukin, Sharon, 2010, *Naked City: The Death and Life of Authentic Urban Places*. Oxford University Press.（＝二〇一三、内田奈芳美・真野洋介訳『都市はなぜ魂を失ったか――ジェイコブズ後のニューヨーク論』講談社。）